

アミーゴ会だより

2016年7月
通巻第27号
季刊 2016-III
www.mex-jpn-amigo.org



発行人：上原尚剛
編集人：河嶋正之
鴻巣勝明
事務局：笠井道彦

メキシコ歴史文化講演会 2016：第1回講座「征服期」報告

エルナン・コルテスのメキシコ征服と女性たち

講師 伊藤滋子

はじめに

アミーゴ会から来年度は「メキシコの歴史で活躍した女性たち」というテーマで、全5回の講座を女性の講師で行いたいとのご相談を受けました。目黒のCafé y Librosで毎月一度、ラテンアメリカの歴史上の女性を一人ずつ取り上げて紹介する講座を開いているので、これまでの講座の中からメキシコの女性だけを取り出して、一応大雑把なプログラムを組んでは見たものの、学者でもない私はどのような方に講師をお願いするかについては全くお手上げでした。ところが、さすがはアミーゴ会、一流の先生方がお引き受けくださり、気がついてみるとその中で、何の肩書もない私だけが甚だしく浮いているではありませんか。しかも一番バッターだったおかげで、講座に先立ってアルマダ大使のご挨拶まで頂戴し、私にとっては身に余る光栄でした。



マリンチェ

担当講座の題名は『エルナン・コルテスのメキシコ征服と女性たち』で、コルテスによって大きく運命を変えられた女性たちのお話です。最初に登場するのは言わずと知れたマリンチェ。コルテスのメキシコ征服はこの人なしには成しえなかったと言われるほどの決定的な役割を果たした、美しく聡明な先住民女性です。現在のベラクルス地方に首長の娘として生まれながら、父親が亡くなった後、再婚した母親が生まれた息子を首長の座につけたいと望んだために、旅の商人に売り渡されてしまいました。そして奴隷に貶められてタバスコに連れてこられ、スペイン人との戦いに敗れたタバスコの首長から貢物としてコルテスに差し出されたのです。このような経歴から彼女はアステカ人の話すナワ語とタバスコのマヤ語を話すことができました。ここにもうひとり、アギラールという、船の遭難でマヤ人の中で8年間暮らし、コルテスによってユカタンで救出されたスペイン人がいて、彼とマリンチェのコンビによる二重通訳ではじめて、コルテスはアステカ人と意思疎通が可能となるという、それまでの航海者にはなかった幸運に恵まれたわけです。

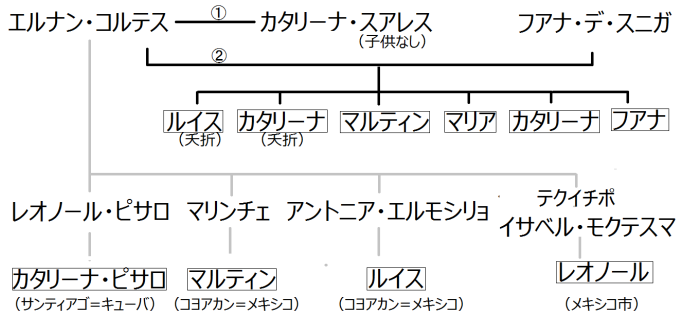
マリンチェはアステカ王国の首都テノチティトラン（現在のメキシコ市）征服を目指すコルテスに付き従ううちにスペイン語も覚え、先住民部族との話し合いに大きな働きをします。先住民たちはコルテスに対して「マリンチェ」と語りかけるほどでしたから、通訳の介在を忘れさせるほどの究極の通訳者です。いったんテノチティトランに入ったものの、7カ月後にスペイン人はそこから敗走するのですが、そのNoche Tristeの夜、タクバにたどり着いたコルテスは真っ先に「マリンチェは生きていますか」と聞き、無事だったことを知ると安堵の胸をなでおろします。彼にとってそれほど重要な存在だったのです。

征服が終わった後、マリンチェはコルテスの子マルティン・コルテスを産みます。メキシコ最初のメスティソの誕生でした。マルティンがまだ2才になるかならない頃、彼女は子供をメキシコに残して、反乱を起こした部下の懲罰のために中米のホンジュラスに遠征するコルテスに通訳として従います。そして出発してすぐのこと、オリサバあたりで、コルテスはこれまでのマリンチェの働きに報いるために、相当の財産を与えた上で、それを持参金として部下のスペイン人、ハラミリョと正式に結婚させました。遠征隊はマリンチェが生まれた地方を通り、コルテスは行く先々で首長たちに挨拶にくるように促したので、彼女の母親と弟もやって来ました。二人は

＝ 目次 (案) ＝

- | | | |
|--|-------|---------|
| 1. 第1回講演会報告：「エルナン・コルテスのメキシコ征服と女性たち」 | 伊藤滋子 | ...1 |
| 2. 第2回講演会報告：「ソル・フアナ・イネス・デ・ラ・クルスの生涯と作品」 | 田村さと子 | ...3 |
| 3. 私とメキシコ：「メキシコ人の幸福度」 | 多田純子 | ...5 |
| 4. メキシコビジネス事始め：「カメラから牛井へ」 | 岩崎 准 | ...6 |
| 5. メキシコへの誘い：「レフォルマに並ぶ歴史：銅像でたどる偉人案内(第2部-③)」 | 酒井梢恵 | ...8~10 |
| 6. お知らせ：歴史文化講演会...4/Fiesta Mexicana2016@お台場/石内都展:Frida is@銀座/ANA 直行便 2017年2月就航...7/ トピックス：2016年1Q成長2.6%/マンモス化石発掘中/新排ガス規制...7/ あとがき...7 | | |

コルテスの子供たち



どんな罰を受けるかと恐る恐る現れたのですが、マリンチェは涙を流す彼らに贈り物を与えて優しく慰め、「私は洗礼を授けていただき、主人コルテスの子を産み、財産を賜った上で、こんどは立派な夫と結婚させていただきました」と語り、与えられた運命をありがたく受け入れていました。彼女はメキシコに帰還する船の中で夫との間にできた娘を産みますが、その翌年亡くなってしまいます。天然痘か、あるいは過酷な旅の疲労によるものだったのかも知れません。

メキシコではこれまで、コルテスと言えば憎き征服者、そしてマリンチェは裏切者の代名詞として扱われてきました。ことにメキシコ革命後、意識的にそのイメージが仕立て上げられていった観もあり、オクタビオ・パスもメキシコ人のメスティソとしての屈折した心理を分析しています。しかしメキシコが自信を持ち始めてきた昨今ではコルテスにたいする評価にも変化の兆しが現れ、また社会における女性観も変わってきたこともあり、マリンチェもそれにつれて名誉回復されつつあるようです。あと3年でメキシコはコルテスの到来500周年を迎えますが、それを機に一段と論議が盛り上がってくるものと期待されます。

テクイチボ

お話しのもう一人の主人公はアステカ王モクテスマの正嫡の娘テクイチボでした。わざわざ正嫡、とことわったのは、モクテスマには20人ほどの子供がいましたが、彼女と弟を産んだ母親が前王の娘で、数多いモクテスマの妻の中では最高位の人だったからです。

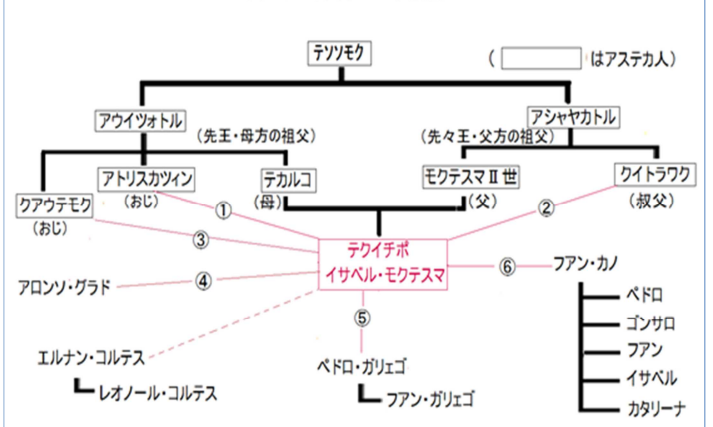
テクイチボは最初に母方の叔父と結婚しましたが、その夫はスペイン人到来の前に亡くなっています。コルテスは平和裏にテノチティトランに入ってすぐにモクテスマを捕虜にしましたが、この時同じ宮殿に住んでいたテクイチボも弟や異母きょうだいたちと共にコルテスの捕虜となり、洗礼を授けられてイサベルと呼ばれるようになりました。

それから半年余りのちにコルテスの部下だったアルバラードの失策でアステカ人の反乱が起き、それを鎮めようとしたモクテスマが投石を受けて亡くなってしまいます。そしてコルテスがテノチティトランから敗走するNoche Tristeの夜、イサベルもスペイン軍の中に混じって一緒に逃げますが、弟や他のきょうだいのほとんどが命を落とした中で彼女は奇跡的にアステカ

側に救出されました。その後、モクテスマのあとを継いで新王となっていた父方の叔父、クイトラクワの妻となりますが、数ヶ月で夫が天然痘で没すると、こんどはその後継者でアステカ最後の王となる母方の叔父のクアウテモクの妻になりました。いずれも彼女がモクテスマの正嫡であったことから、新王に権威を与えるために結婚させられたものです。そしてコルテスがテノチティトランの再征服を果たした時、夫クアウテモクとともにスペイン軍に捕らわれ、コヨアカンにあるコルテスの館に連れてゆかれてそこで暮らしました。

征服が終わって2年半ばかり後のこと、クアウテモクは妻を残して、コルテスのホンジュラス遠征に連れて行かれ、行軍の途中、反乱の罪で処刑されました。遠征から帰還したコルテスはそのことをイサベルに伝えるとともに、彼女にメキシコ溪谷でも最大のエンコミエンダ（荘園）を与えたうえでスペイン人と結婚させて、彼女を後見するというモクテスマとの約束を果たしました。しかしその夫が一年足らずで不審死を遂げると、コルテスは彼女を別のスペイン人と結婚させますが、イサベルはその時すでにコルテスの子供を妊娠中でした。彼女は半年後生まれてきた娘の顔を見ようとせず、生涯その子供を拒み続けました。(娘はコルテスの庇護を受けて育ち、のちにサカテカスの裕福な銀山の主と結婚しています。)その後、夫との間に男児が一人生まれますが、またも夫は亡くなり、最後に

イサベル・モクテスマの家系図



フアン・カノと結婚します。6番目にして初めての自分の意志で選んだ夫でした。彼の父はスペインのカセレスの市長、叔父は王室の秘書と、これまでの夫と違い本国でも比較的影響力を行使できる家柄でした。カノとの間には5人の子供を得て、3男フアンはスペインに渡って貴族の女性と結婚し、カセレスにはモクテスマ宮殿と名付けられた館が残されています。また、サラマンカにある日西会館はその子孫の一人が住んだ館で、中庭の一角にある石碑には「ここにはサラマンカに伝わる美しい伝説の主人公であるドニャ・マリア・モクテスマが住んだ」と刻まれています。

イサベルの子孫はメキシコのみならず、スペインやベルギーなど、旧ハプスブルグ家圏内のヨーロッパ各地にまで散らばっているということです。(了)

【編集部注:メキシコ歴史文化講演会2016(全5回)は「メキシコの歴史で活躍した女性たち」を共通テーマに5人の女性を取り上げ、各時代の専門家である5人の女性講師に時代背景を含めて解説をお願いしています。本号では第1回(4月6日)と第2回(5月12日)の講師のご寄稿を掲載します。残る第3回(6月24日)、第4回(7月29日)、第5回(8月31日)の報告は10月号に掲載予定です。お楽しみにしてください。なお、講演会の概要を4ページ末尾に掲載しています。皆さまお誘い合わせでのご出席をお待ちします。】

ソル・ファナ・イネス・デ・ラ・クルスの生涯と作品

帝京大学外国語学部教授 田村さと子

はじめに

修道女ソル・ファナは17世紀のスペインの植民地ヌエバ・エスパーニャの副王時代の社会で活躍した詩人である。その名声はスペイン本国にも届き「アメリカの10人目のミューズ」と称えられた。

わたしが彼女の作品に初めて触れたのは最初にメキシコ国立自治大学に留学したときだが、続いて留学したマドリードのコンプルテンセ大学の韻律学の授業では、ロペ・デ・ベガやケベド、ホルヘ・マンリケなどと同様、スペインの詩人として扱われていた。研究者によっては、独立以前のアメリカ大陸の文学をスペイン文学とみなして扱うことがあるためであろう。

また男性による男性のための当時の文化の中で、知性を備えた女性であるがゆえに受けた攻撃に対する自己防衛を行うと同時に、課せられていた社会的制約の克服をめざし、女性が社会で役割を果たすことができ、果たすべきであることを実証した。女性擁護を主張し、女性意識というスペイン系文化史における新しい要素を体現した存在でもある。

文学作品理解のためには、その詩人や作家が生きた社会や時代の特徴、その生涯などの理解が不可欠である。彼女が生きた時代は口頭文化が主流であり、書物はわずかししか出版されておらず、しかも男性によって男性のために書かれ読まれた学問的・宗教的な書物であり、世俗の文学活動を行ったすぐれた書き手であるソル・ファナは著しい例外的存在であった。また時代背景としてはスペイン文化をアメリカに適合させ本質的に変化させた時代であることを見落とせない。

ソル・ファナ：波乱万丈の生涯

出生の日に関しては議論があったが、彼女が生まれたとされるサン・ミゲル・ネパントラを管轄するチマルワカン教区に残る洗礼証明書から1648年12月2日が正確であろうとされる。この証明書に「教会の子 イネスなる女兒」と書かれていたことから非嫡出子であったことがわかる。クリオーリャであった母親は農園を経営する女傑であったが、父親は彼女が5、6歳のころに姿を消してしまい、やがて一緒に暮らすことになった読書家で文学愛好者の祖父の家の書斎の書物の世界が彼女の運命に大きな影響を与えた。

8歳のときにメキシコ市に移り住んだ。当時の新副王のマンセラ侯爵夫人に気に入られて、16歳で女官として宮廷に入る。彼女の知性、あでやかさ、身寄りのない境遇が副王夫人に憐憫の情を持たせた、とされる。

16歳から20歳までを宮廷で過ごす、その美貌と知性が宮廷の人々を感服させ、その機知と思慮分別ゆえにもてはやされているときの1669年、21歳で聖ヘロニモ修道院で修道祈願を行った(19歳で跣足カルメル会聖ヨセフ修道院に入ったが、世俗に戻っている)。

修道女になった理由については、当時の結婚制度では結婚するには嫁資が必要であり、縁組には当人同士の気持ちよりも社会的・物質的な配慮が先行して、父不在の身としては結婚できなかったからであろう、と受け止められている。また当人の性格としても宗教的な資質ではなく、結婚よりも禁欲的で孤独な生活を好んだものと思われる。

当時、聖職はひとつの職業であった。出自が名前と社会的な地位を決定するだけではなく、社会秩序の礎となっている階級社会では、聖職は彼女のような境遇

ではもっとも品位が保てる確実な対応手段であった。ただし、カトリック教徒で穏便な教会の役人である修道女となるためには、名門出身であることと支度金が必要であった。幸運にも彼女の精神的な指導者である神父の影響下にあった資産家が支度金を支払ってくれたおかげだった。

なぜ文学者としての頂点で彼女は失脚したのであろうか。1690年、ポルトガル人イエズス会士ビエイラに対する批判『カルタ・アテナゴリカ』(アテナの知恵に匹敵する)が、ソル・フィロテア宛ソル・ファナの手紙として出版された。この手紙出版の背景には、当時の大司教アギアル・イ・セイハスとプエブラ司教マヌエル・フェルナンデス・デ・サンタ・クルスという二人の高位聖職者の対立があった。

この『カルタ・アテナゴリカ』は、女性を蔑視するビエイラ批判であると共に変質した女嫌いであったアギアルに対する批判が込められている論争的なテキストであった。また女性であるゆえに受ける攻撃に対する自己防衛であるとともに、普遍的な女子教育の提案などの女性擁護が本質的な主張として込められている。ここにスペイン文化史に「女性意識」の出現という新たな要素が認められるのである。

1691年の凶作、暴動により副王と行政に対する権威が失墜して副王権力を弱体化させる一方で、教会が社会制度の支柱となるとともに宗教的迷信が高まり、大司教アギアル・イ・セイハスの権威を高めた。

予期せぬことに1693年、彼女の強力な擁護者で元副王のラ・ラグナ侯爵が急逝してしまったため、やむなく身の安全を守るためソル・ファナは全人生の総括的告解を行い、1694年、人文学をあきらめる文書に署名し、所有していた書籍や楽器などを大司教に引き渡した。翌年の4月17日、修道院で蔓延していた疫病にかかった仲間の看病をするなか、自らも罹患したため亡くなっている。



ソル・ファナの作品を読む



ソル・ファナの作品を編んだアンソロジーの中で、必ずと言ってよいほど採録されている代表作の5編のソネットを取り上げた。

ソル・ファナは生涯を通してソネットを書いている。彼女のソネットの構造は14行詩であり、4行詩×2詩節+3行詩×2詩節で構成されており、各行はリズムのある11音節で書かれている。

作品の言葉について：

彼女の時代の言葉には、自らを奴隷、副王を太陽と呼ぶなど仰々しい形容詞の使用などの誇張法がまず目に付く。ここには当時の絶対主義と家制度が反映されており、この二つの秩序は日常の言葉遣いに溶け込んでいることがわかる。また彼女が書いた恋愛の友情詩の起源は、プロバンスの吟遊詩人の愛の表現を、主君に対する臣下の尊敬を封建的な語彙と交錯させる宮廷愛の詩型にある、とされている。

ソル・ファナの作品：

彼女の作品の半数以上は献辞や書簡、祝辞、哀悼詩などで行事などの機会に書かれており、その形式はソネット、レドンデーリヤ、ロマンセ、グロッサ、リラなど多様な形式に及ぶ。作品の特徴としては、韻律やリズム構成の巧みさが挙げられる。

レオノル・カレト(マンセラ侯爵夫人)の死を悼むソネットから装飾美が特徴的な3篇(En la muerte de la Marquesa de Mancera、A lo mismo、Lamenta con todos la muerte de señora Marquesa de Mancera、1674年)を読んだ。いずれもバロックの美学と装飾のため、個人的な感情を凍結して建造物のように言葉を配しており、完璧で清涼な作品として高い評価を受けている。

続いて幻影をテーマとし、恋愛詩の総括とされるソネット Detente, sombra de mi amor esquivo...を取り上げた。本作品は閉じ込められた修道女の内面の飢餓感に呼応した作品とされる。幻影や虚像と彼女の生きる現実世界の葛藤、幻影の世界と現実世界という二つの世界の媒介として当時ヨーロッパで流行していた「磁石」の比喩が効果的に用いられている。

最後にソル・ファナにしては珍しい個人的なテーマ、彼女自身の肖像画を取り上げた A quien mire un retrato de Sor Juana を読んだ(右欄掲載)。この作品は言葉による寓意画であるとともに、彼女のソネットの中で最高傑作とされる。(了)

ソル・ファナの年譜

出生年

- ・1648年12月2日説(Salceda, Ramírez)
- ・1651年11月12日説(Calleja)：

Juana Inés Ramírez de Asbaje, San Miguel Nepantla の小農園で生まれる。洗礼証明書(チマルワカン教区)に「教会の子 イネスなる女児」と記載(1648年12月2日)。

1651年頃：塾「アミーガス」に通い、読み書きを覚える。Nepantla と母方の祖父所有の Panoaya の農園で過ごす。

1656年：祖父死去。Panoaya を離れメキシコ市に住む母方のおば María Ramírez の許に送られる(8歳)。

1664年：副王マンセラ侯爵夫人 Leonor Carreto の女官として仕える(16歳)。

1667年：跣足カルメル会に修道女として入る(19歳)。

1669年：聖ヘロニモ会修道院に入る(21歳)。

1674年：ベラグア侯爵が新副王として着任するに伴い、マンセラ侯爵夫妻がスペインへの帰国のためベラクルスに向かう途中、侯爵夫人レオノル・カレトが死去。

1680年：ラ・ラグナ侯爵夫妻が新副王として着任。侯爵夫人マリア=ルイサ・マンリケ・デ・ララと親交を深める。

1688年：ラ・ラグナ侯爵夫妻がスペインへ帰国。

1689年：ラ・ラグナ侯爵夫人マリア=ルイサの尽力で『カスターリアの泉の氾濫』出版。

1690年：プエブラ司教の求めに応じてビエイラの説教を批判した『カルタ・アテナゴリカ』を書く。

1691夏から1693年：穀物不足から暴動が発生。

1693年：ラ・ラグナ侯爵急逝に伴い全人生の総括的告解を行う。

1694年：文学放棄を宣言(46歳)

1695年4月17日：疫病のため死去(47歳)。

A quien mire un retrato de Sor Juana

Este que ves, engaño colorido,
que, del arte ostentando los primores,
con falsos silogismos de colores
es cauteloso engaño del sentido;

éste en quien la lisonja ha pretendido
excusar de los años los horrores
y, venciendo del tiempo los rigores,
triunfar de la vejez y del olvido:

es un vano artificio del cuidado:
es una flor al viento delicada;
es un resguardo inútil para el hado;

es una necia diligencia errada;
es un afán caduco, y, bien mirado,
es cadáver, es polvo, es sombra, es nada.

メキシコ歴史文化講演会2016の概要

☆第4回講座：近代(7月29日18:00~@メキシコ大使館)☆

演題：「フェミニズム運動に影響を与えた国際的画家
フリーダ・カーロ(1907~54)」

講師：山本厚子・ノンフィクション作家

要旨：フリーダが描いた絵画のテーマはジェンダー問題一時代背景、生い立ち、国際画壇登場、絵画テーマ、フェミニズム運動への影響などを明らかにする。

☆第5回講座：近現代(8月31日18:00~@メキシコ大使館)☆

演題：「女性作家ロサリオ・カステリャノス~小説作品にみるメキシコ社会と女性の生き方」

講師：洲崎圭子・お茶の水女子大学院博士後期課程在籍

要旨：詩人・小説家・批評家・劇作家・外交官・知識人ーロサリオ(1925~74)が先住民擁護主義文学でチアパス女性の人生を描く小説群から社会へのメッセージを探る。

☆以下の3講座はすべて終了しています☆

第1回講座：征服期(4月6日)

演題：「エルナン・コルテスのメキシコ征服と女性たち」

講師：伊藤滋子・シリーズ「歴史の中の女性たち」執筆者

第2回講座：コロニアル期(5月12日)

演題：「ソル・ファナ=イネス・デ・ラ・クルスについて
~修道女でバロック詩人」

講師：田村さと子・帝京大学外国語学部教授

第3回講座：改革期(6月24日)

演題：「メキシコ帝国再建の夢と皇后カルロッタ」

講師：立岩礼子・京都外国語大学教授

2016/04/06
以上



私の第二の祖国と言っても過言でない México…。20 年余り暮らしたメキシコに昨年の6月にお別れすることとなり、はや一年が過ぎようとしています。メキシコ生活で今何が一番恋しいですか？と聞かれたとき、私はなんと答えるかしら、と自問自答してみました。メキシコの青い空・メキシコの豊かな食事・メキシコの街並み・メキシコの時間の流れ…。いろいろあります。でもやはりメキシコの人達の温かさや愛情の深さ、彼らの“幸福度の高さ”だと答えたと思います。家族・友達を何よりも大切にするメキシコ人の愛情の深さ…。ちょっとした知り合いに対しても何かと気を遣う彼らです。道ですれ違えば ¡Hola! とニコニコと挨拶すること、何か困ったことはないか、といつも周りのひとを気に掛けること。あちらに住んでいるとあたりまえのように感じていたことですが、現代社会ではとうの昔に失われてしまったことのように。人と人の関わりの温かさが現代のメキシコにはちゃんと残っています。

メキシコ人の“幸福度”

会員 多田純子



みんなハッピーの遺伝子変異

最近ちょっと面白い記事を読みました。遺伝子変異のテーマであったのですが、幸せ度を聞いた世界各国の調査結果と神経伝達物質に関係するある遺伝子変異について民族ごとの割合のデータを照合したところ、“幸せだ”と答えた国民が最も多かったメキシコでこの遺伝子変異を持つ人の割合が最も高いことが分かったそうです。

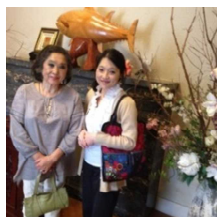
その遺伝子については私はまったくわかりませんが、20 年暮らしたメキシコで私にも遺伝子変異が起こったと確信しました。メキシコ人の暮らし方はまさしく幸せ度を高めるものだと思うからです。

たとえば、私の昨年までの生活を思い返したところ、朝起きて窓の外をみれば綺麗な朝陽と青い空(曇り空、雨で明けることは年間通して 10 日もないと思います)、絞りたてのフレッシュジュースを片手に会社に出勤、¡Buen día!と挨拶をかわしながらひとしきりおしゃべり、数時間すれば ¿Tomamos café? (コーヒーどう?)と誘い合ってコーヒーを調達に…。午後 2 時過ぎれば ¿Qué vamos a comer? (今日は何食べる?)とみんな仲良くゆっくり食事を楽しみます。誰かが誕生日ならば必ず ¡Queremos pastel! (ケーキが欲しいね!) となります。男の人たちも甘いもの大好きですから。

一日の仕事を終えて会社を出れば、ほとんどのひとは家族に会いに家に一目散でしょう。また一日の間に何回、家族・親友・恋人と連絡をとるか聞いたら、びっくりです。これは治安のよろしくない国だからと大切な人の安否を気遣うだけではないと思います。

¿Como vas? (どんな調子?)、¿Qué comiste? (お昼は何食べたの?)とそういう連絡を逐次とるのがいたって自然なことなのです。それだけ自分の大切なひとがどうしているかいつも心にあるから。また心にあるだけではなく、素直にそれを相手に聞けるこの国民性は、やはりすばらしいと思います。

先日 20 年ぶりの GW を日本で過ごし、最終日の日曜日はちょうど母の日でした。日本でももちろんお祝いをする方も増えていますが、メキシコでは“母の日”はメキシコの聖母“マリアグアダルーペの日”、“メキシコ独立記念日”について、いえ、同じくらい重要な日です。母の日は曜日に関係なく毎年 5 月 10 日と決まっています。



母の日は自分のお母さんをお祝いするだけでなく、友達のお母さん、自分の友達がお母さんならその友達、とにかく国中のお母さんを国を挙げてお祝いするような日です。当然ながら母の日だからと会社では休日とするところもあります。仕事にならないからですね(笑)。実際に子供を持たない女性でも、将来のお母さんでしょ?とか、可愛い女性だから (mamá という言葉から派生した可愛い女性を表す言葉 mamita があるからです)とか、すべての女性を対象にしてしまうようなところが、メキシコの面白さです。

私の場合も女性であるというだけで、たまたま母の日にでかけたレストランで薔薇をもらいました。No soy mamá. “私はお母さんじゃないですよ。”と言ってしまったら。No importa, Señorita. “そんなことは関係ないですよ。お嬢さん(?!)”と言われました(笑)。本当に楽しい国です。なんだか、みんながハッピーになれるんです。

幸せ度の高い人間関係づくり

また、メキシコ(シティーの場合ですが)の気候は一日の間でとても簡単に変化します。私はよくメキシコ人の友人に、ここには一日の中に四季があるみたいね、と話します。人との付き合いの中で「四季をともにする」とよく言いませんか。「そうして相手のことがわかるようになる」と。とすると、メキシコでは一日一緒にいればなんだか相手のことがわかるような…。ことかしら〜と、そんな感覚がします。それだけオープンで、自分をうまく表現できるのがメキシコ人だと思いますし、一緒にいるこちらまでもうまく誘導してくれるのは彼らのすごさだと思います。

幸せとは自分のことだけではなく、常に周りの人との関わりの中で生まれてくるものだと私は思います。遺伝子変異はともかく、メキシコ人の幸せ度が高いのはやはりその生活習慣にあるのでしょうか。国民の幸福感には、国の政権の安定度や経済状況などが関係していると思われがちですがそればかりではないですね。

私の 20 年暮らしたメキシコでのすべての思い出に、いつも人が関わってきます。ひとつひとつの出会いが人生の宝物だと思います。再びメキシコに行く日が来るとよいなと思いながら、今は遺伝子変異を起こした幸福度の高い私のメキシカンオーラを周囲の人にシェアできたら、それこそ ¡Yo estaría Feliz! (私も幸せ!) と思いながら、日本で暮らしています。(完)

カメラから牛丼へ！

～メキシコで牛丼店立ち上げへの3年間～

会員 岩崎 准

精密機械メーカーの海外駐在員として30年を海外で過ごし、その間、北米、ブラジル、メキシコと貴重な体験を経た上で61歳で退社する。未だやり残した感を持っていたところ、5,000店舗のレストランを展開しているZenshoからの誘いで第二の人生を過ごすこととなった。

第二の人生はメキシコで新規開店

国内で2か月ほどの研修を終えると、メキシコでの「すき屋」の立ち上げの担当をすることとなる。今までの業界とは全く異なるジャンルでの仕事に対し、戸惑いはあったものの、新事業を立ち上げるプロジェクトに興味を持ち、2012年の1月からのメキシコ行きとなった。

若手の日本人が語学研修ですでに赴任しており、私と二人でのスタートである。仮の事務所の選定、それぞれ7～8社の面接を行いながらの弁護士事務所と会計事務所の選定がまず初めの仕事となる。知人、友人を通じてのネットワークを総動員しながら、何とか選定まで進める。ただし、Zenshoの場合はすべての決済は東京本社であり、候補者のレポートを東京提出しての承認プロセスがとられることとなる。

おっとアブナイ

次の重要課題は食材工場の場所探し、店舗候補探しへと進めることとなる。店舗への食材は、スライス牛肉、野菜類等すべてを毎日デリバリーする必要があり、交通の便がよく、事務所も併設できる、600平米ほどの食材工場の場所さがしとなる。

当初は中央市場近くの建物と仮契約まで進めるも、届いた契約書を吟味すると、条件になかった中央市場管理組合への特別コミッション項目が入っていたり、さらにその%もブランクのままだったり、既に会長承認ももらっていた物件ではあったが、危険性を感じ、最終段階でキャンセルした（ある企業では、この管理組合から膨大なペナルティーを要求されたこともあるとか）。

その後、ある友人の紹介で、飛行場近くの物件に落ち着き、何とか内部の建設作業へと進めることとなる。実際の建設をスタートするには役所の許認可が必要となり、弁護士等総動員して進めるも、この作業にかなりの時間がかかってしまうことになる。

さらに、インフラ関連の水道、電気、特に水道の水圧が極めて低い地区であり、食材工場では大量の水を毎日必要とするので、地下の水槽と、天井には5トンのタンクを置き、水問題をカバーする。電気の使用量も多く、高圧受電が必要となり、大きなトランスを自前で設置する。これらは最初から理解していた課題ではなく、途中から発生した諸問題であり、電気については、店舗開店の際、毎回悩まされる問題となる。

この間、現地従業員の採用をスタートするが、現地では全くの無名会社であり、メディアで募集かける効率のよい方法が少なく、採用エージェンシーに依頼することにする。このエージェンシーには本社の管理社員、経理マンにとどまらず、店長、スタッフまで、幅広い人員の確保で大変サポートしていただいた。



(開店当日、取材に来た雑誌編集者と筆者)

地を這う店舗開発

次の重要課題は店舗候補の開拓である。かなり早い段階でオープンしたく、フードコート内店舗、一戸建ち店舗等10店舗を対象に、各ターゲットエリアでの物色を開始する。

この店舗開発に関しては、近くの駅の乗降者数、ショッピングセンターへの来客数、競合のM店舗への来客数をベンチマークとしたりで、候補店舗を選別する。フードコートへ丸一日へばりついて来客数をカウントし、我々の店舗の予想数をはじいたりする。前の仕事で5年半DFに住んだ経験ありとはいいながら、今回は町全体をくまなく訪問しながら候補店舗の選定を進める。このおかげで、2年間の車の走行距離はちょうど5万キロとなった。

一号店をCoyoacanのショッピングセンター内に確保し、店舗建築を開始する。これもすんなりスタートできた訳ではなく、厨房機器は現地手配となるので、現地メーカー数社を訪問しながらの手探り状態での手配となる。重要な機器類、備品類はすべて日本からの輸入となる。

食材は地産地消

食材工場の準備が進み、一号店の目途が立ち始めると、次は食材の確保となる。牛肉はかつてメキシコからも輸入していたこともあり、同じ食肉メーカーから日本での使用と全く同じ部位の牛肉の購入手配とする。他にも、鶏肉、豚肉、玉ねぎ、レタス、ネギ、米、みそ、醤油、調味料まで膨大な種類の購入の手配となる。

現地スタッフとメーカー訪問したりで選定をすすめるが、Zenshoは食の安全に対し極めて厳しくチェックしており、卸業者を通して購入するのではなく、メーカーを直接訪問して、常に同じ品質の商品を購入できる体制があるのか否かを現場で確認するのを常としている、とてもこだわりの強い会社である。

店舗開発については思うように候補が見つからず、この間、現地の知人、大使館、JETROさらにPromexicoの方々にも多大な協力をしてもらい、3店舗の目途が

Polanco 地区をふくめて立つことになる。

2 店舗目の Polanco 開店の際は、前述の電気でトラブルとなり、やっと高压配線できあがったと思ったところ、店舗の前のオーナーが不払いの電気代 5 万ペソほどが残っており、泣く泣く我々が支払う羽目となる。

大繁盛のコヨアカン一子店初日

いろんな難問を経ながら、2012 年 9 月 11 日に無事第一号の Coyoacan 店を開店することになる。前日の夜中過ぎまで、食材工場準備を進め、翌日の開店である。当日は開店前から沢山の方々が並んでいただき、やっとの思いでこの日に到達することができた。ただ、予想以上に沢山のお客様が来ていただき、不慣れた店舗は準備に手間取ったり、人気のコロッケが早々と売り切れとなったりで、楽しみに食べていただいたお客様の笑顔を見ながらの初日無事終了となる。

後日の週末に店舗で食事をしていた若夫婦の方と話したとき、片道 3 時間かけて Bajio 地区から食べに来ていただいたとのこと、さらに「おいしかった。食べに来たかいありました」とのコメントをいただき感激した次第である。

DF での出店が一段落したあと、この Bajio 地区の日本人の要望にこたえるべく、13 年の後半から冷凍の牛丼の素の直接販売を始め、各社の駐在員家族の方々から大変好評を得ることになり、新商品も追加し現在も好評販売を継続している。

様々な難問にぶつかりながら、その都度、友人、知人の方々に大変助けていただき、無事 3 年で食材工場と 3 店舗を開店し、4 号、5 号店の候補を見つけて、私の 3 年の立ち上げ業務を終了し、2013 年末に帰国することとなる。

まったく経験のない業界で、さらに新規事業の立ち上げで、全て模索しながらの毎日ではあったが、サポートしていただいた方々の温かさを感じながらの貴重な経験をすることが出来たと、しみじみと感じている次第である。(了)



【編集部注：Sukiya México の HP によれば(<http://sukiya.mx>)6 月末現在、計 6 店舗が営業中 (Centro Coyoacán, Pabellón Polanco, Multiplaza Aragón(EdoMex), Toluca(EdoMex), Universidad, Galerías Coapa-6 月 28 日開店)。写真は Toluca 開店 by Así Sucede】

お知らせ

Fiesta Mexicana 2016 in お台場 Tokyo

お台場でメキシコする 3 日間!

会期：2016 年 9 月 17(土)・18(日)・19(祝)日

時間：11:00~19:00

会場：お台場ウエストプロムナード

詳細：<http://www.fiestamexicana-tokyo.com/>

メキシコ独立記念日を祝うフィエスタ・メヒカーナ@お台場は今年で第 17 回。メキシコ・日本アミーゴ会は協賛団体として実行委員会に参加し、日墨交流の輪を広げる楽しさ満載の 3 日間となるように取り組み中。メキシコ写真コンテストの作品も募集中。応募締め切りは 8 月 31 日。豪華副賞も準備中。応募要領を HP でお確かめのうえ、作品をドシドシお寄せください。

¡Viva México! をお台場で grito(叫び)しましょう。注目：大阪と京都で 9 月にフィエスタ・メヒカーナが例年同様に開催されます。今から待ち遠しいですね。

石内 都展-“Frida is”@資生堂ギャラリー

～フリーダと対話する写真展～

会期：2016 年 6 月 28 日～8 月 21 日 (月曜休館)

時間：11:00~19:00 (平日) / 11:00~18:00 (日/祝)

会場：資生堂ギャラリー(東京銀座資生堂ビル B1)

詳細：<http://www.shiseidogroup.jp/gallery/exhibition/index.html>

写真家・石内 都が 2012 年、フリーダ・カーロ博物館<青い家>の依頼でフリーダの遺品を撮影した「Frida by Ishiuchi」と「Frida 愛と痛み」シリーズから 31 作品を展示。入場無料。銀ブラの楽しみが増えましたね。

ANA 直行便、2017 年 2 月就航

ANA は 5 月、成田～メキシコシティ間の直行便を経由地なしで 2017 年 2 月より毎日運航すると発表。機材はボーイング 787-8 型機で快適な旅になりそうです。2015 年 7 月開設されたメキシコ営業支店奮闘記は、本誌「2015 年 10 月号」に掲載。「里帰り」が楽しみです。詳細：<https://www.ana.co.jp/group/pr/pdf/20160512.pdf>

トピックス

2016 年 1Q の GDP 2.6% 成長

2016 年第 1 四半期(1~3 月)の実質 GDP 成長率は前年同期比 2.6%と 24 四半期連続のプラス(INEGI 5 月 20 日)。大蔵省は同日、2016 年通年予測を 2.6~3.6%から 2.2~3.2%に下方修正し 2017 年予測 2.6~3.6%を維持。内需は堅調も油価低迷による緊縮財政の継続と世界経済の先行き不安などの外需が波乱要因。中銀は 6 月 30 日、政策金利を 3.75%から 4.25%に引き上げ。

実質 GDP 成長率(前年同期比%) (出所：INEGI)

2014					2015					2016
1Q	2Q	3Q	4Q	通年	1Q	2Q	3Q	4Q	通年	1Q
2.3	1.8	2.3	2.6	2.2	2.6	2.3	2.7	2.4	2.5	2.6

マンモスの化石、メキシコシティで発掘中

メキシコシティ郊外の Tultepec で古代人が切断したマンモス化石の発掘作業が進んでいる。この約 1 万 4000 年前の化石は、昨年 12 月に下水管工事中に発見。シティ周辺には先史時代、浅い塩水湖がありマンモスが身動きが取れなくなる事例がたびたび発生。すでに 50 頭余のマンモスの化石が発見されているという。

詳細：<http://www.afpbb.com/articles/-/3091798>

新排ガス規制、7 月から施行

自動車排ガス検査の厳格化が 7 月 1 日からシティと周辺州に導入。プレート末尾数字による通行規制は廃止され排ガス検査ラベルによる運用に移行。新排ガス検査は「すべての車両」が対象で、大気保全に貢献と期待されるが導入時の混乱も予想される。

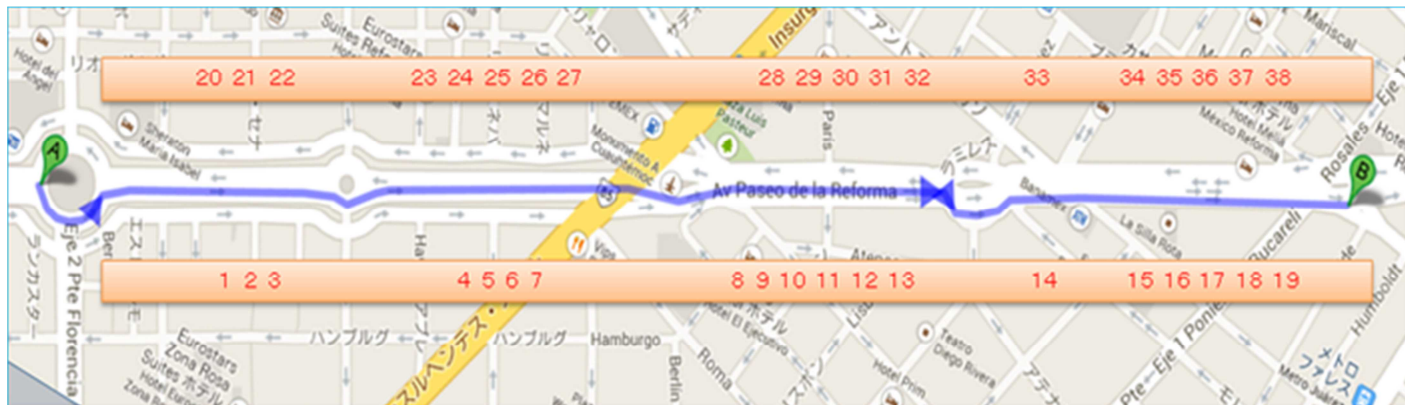
あとがき：木々の緑が深くなり梅雨晴れの青空が眩しい季節です。メキシコ歴史文化講演会 2016(全 5 回)も毎回好評で早くも 2 講座を残すだけです。今号には第 1・2 回の講演要旨を各講師にご寄稿いただきました。お二人の会員には豊富な深いご経験を頂戴し、4 月号で勝手休載した「レフォルマに並ぶ歴史～銅像でたどる偉人案内」に掲載できました。国際情勢の激変にも負けず、9 月の Fiesta Mexicana を楽しみに日本の夏を乗り切りましょう。 [か 20160630]

レフォルマに並ぶ歴史(第2部-③)

～銅像でたどるメキシコ偉人案内～

前メキシコ観光(メキシコ) 酒井梢恵

[編集部注:「レフォルマに並ぶ歴史～銅像でたどるメキシコ偉人案内」は本誌第16号(2013年10月)より連載が始まり、通常の旅行ガイドでは読めない内容で大好評でしたが、残念ながら連載第7回(第22号2015年4月)で最終回を迎えました。しかし、会員読者から連載再開の熱い要望が多数編集部へ寄せられ、筆者の酒井梢恵さんにご無理をお願いしたところ「第2部」として再び連載することができるようになりました。引き続き「メキシコ偉人伝」をお楽しみ下さい。なお、酒井さんは2015年6月にメキシコ観光を退社し日本で新しい生活を始めておられることを申し添えます。]



GENERAL DON ANTONIO LEON

(地図中 13)



1794年7月4日、現在のグアナファト州レオン市—当時のHUAJUAPANに生まれた軍人かつ政治家である。幼い頃から軍事に親しみ、1811年に少尉の位で地元の中隊に入隊、1814年には中尉、1817年には將軍の位まで昇格した。この時期はまさしくメキシコが独立戦争(1810～1821年)を始めた時期と重なる。

当初は植民地政府側の一派である王党派の軍に所属し戦っていた。1821年6月6日、HUAJUAPANのTEZOATLANという都市が独立を宣言すると、スペイン本国の王党派の軍隊はその鎮静化に踏み出した。

彼も参加したこの戦いでは、TEZOATLAN側はたったの26人の兵しかおらず、その武装も十分と言えるものではなかった。そこに王党派の軍は倍近い人数で襲撃した。HUAJUAPAN側は王党派との絶対的な力の差を前に降伏し、大砲3台・拳銃122丁・薬莖40,000発を譲り渡した。

この戦いでの彼の功績は、独立革命後にメキシコ皇帝となったAGUSTIN DE ITURBIDEの耳にも届き、DON ANTONIOは少佐の位を授かり、翌年1822年には大佐へと昇格した。

メキシコ独立達成後にITURBIDEが自らメキシコ立憲皇帝アグスティン1世として戴冠し、帝政が始まった。その統治方法は軍隊に重きを置くものであり、DON ANTONIOは祖国の有り方に不信感を抱くようになった。

1823年6月1日、彼は自らの軍の士官や上流階級の人々を集め、メキシコの政治の有り方について議論を行った。彼は連邦制を提案し、この会議で承認された。そして手始めにオアハカに対し、自由主義かつ主権を持つ州であると宣言した。この流れをもって、彼自身の主義主張も保守主義的なものから、自由主義的なものへと変化していった。

その後も数々の戦いに参加し、米墨戦争(1846～1848年)中は北米への軍事遠征にも参加した。その後、將軍となるも、政府の召集があれば率先して戦場へ赴き、オアハカでは現地の精鋭部隊の指揮を執った。彼の軍は敗退したもののその功績は大きく、メキシコ国軍の再編成においては中核部隊の指揮官に任命された。その後も軍人としての生活を続け、メキシコシティに戻ってからも自由主義体制の実現を求めて数々の戦いに参加し、指導者に相応しい勇敢な姿を部下たちにみせ続けた。

その戦いに明け暮れた人生の最期も戦いの中にあり、1847年9月8日の夜8時、戦いで受けた重傷が原因で息を引き取る事となった。

DON PLUTARCO GONZALEZ PLIEGO

(地図中 28)



1813年、トルーカに生まれた軍人である。若い頃は、科学と文学の道に進んだが、後に軍に入隊する。

米墨戦争(1846～1848年)の際は少佐として戦いに参加した。また、1855年にはサンタ・アナ政権に対する「アユトラ革命」にも参加した。最終的にはメキシコ州知事も勤め、1857年10

月21日に同州マリナルコでその生涯を終えた。

GENERAL DON ESTEBAN CORONADO HINOJOSA

(地図中 8)



1822年、ソノラ州 TACUPERO に生まれた軍人であり、政治家である。3歳の時に、生まれ故郷を離れ、家族とともにチワワ州の MORIS に移住した。また若い頃から政治と軍事を学び、1847年に軍隊に入隊した。この頃メキシコ北部は、米墨戦争(1846~1848年)の真っ只中であり、彼も入隊と同年にアメリカによるチワワ

侵攻に対して、軍の一員として戦った。

そして時代はレフォルマ戦争(1857~1861年)に突入していく。戦争が始まる前から、スペイン本国やカトリック教会の庇護に預かりたい保守主義派と、ヨーロッパの実質支配から脱してメキシコ独自の発展を求める自由主義派との間で対立が生まれていた。

その流れの中で、彼もレフォルマ戦争開始の前年の1856年に、愛国心に基づいた自由主義の思想によって、保守主義側に捕らえられ、短期ではあるが投獄された。

1857年、彼は憲法制定議会の議員に選出され、自由主義に基づく教会財産の没収を強く謳った「レフォルマ憲法」の制定に尽力した。この自由主義的憲法は後の大統領 BENITO JUAREZ によって発布された。

また、こうした政治家としての活動の一方で、マサトランやテピックなどで自由主義側につき軍人として戦った。戦いの終盤、グアダハラで彼はその人生を左右するほどの重傷を足に負った。戦闘の中で敵軍に包囲されたその時、彼には援軍も軍備もなかった。それでも彼は戦場に突撃し、この傷を負ったのである。

医師たちの診断は彼に二者択一を迫るもので、「6ヶ月かけて完治を待つか、足を切断し1ヶ月で戦場に戻るか」というものであった。そして彼は、足の切断を選んだ。その時に彼が残した言葉は次のようなものである。「私、CORONADO 将軍は足を失っても、私自身の時間を祖国に捧げることができる」。

しかし、その切断手術は失敗に終わり、この手術が原因で数時間後に息を引き取った。1859年11月2日のことであった。彼の最後の戦場となったグアダハラのあるハリスコ州議会は、彼の死後、その功績を称えて「州の英雄」の名を与えた。

DON LEON FRANCISCO GUZMAN MONTES DE OCA

(地図中 9)



1821年11月5日、メキシコ州の TENANGO DEL VALLE に生まれた政治家である。

法律を学び弁護士となった彼は、レフォルマ戦争(1857~1861年)時の1857年憲法編纂委員会の一員として活動した。

その後、プエブラの上級裁判所の裁判長となり、さらには検事総長の職務も務めた。1861年には外務大臣に任命され、

1867年にはグアナファト州の臨時知事となった。

しかし、彼は保守主義派の人間であり、レフォルマ戦争後の民主主義とインディオの権利拡大を強く批判した。そして自由主義に基づいて教会権力の剥奪などを推し進めた BENITO JUAREZ の大統領再選に強く抗議をしたために、1867年9月11日、グワナファト州臨時知事の役職から解任された。

彼の死は1884年5月3日、ヌエボレオンでのことであり、死因は肺炎であった。

GENERAL IGNACIO PESQUEIRA

(地図中 35)



1820年12月16日、ソノラ州の ARIZPE の資産家の家庭に生まれた(1818年生まれという説もある)。若い頃はマドリッドとパリで勉学に励み、後の彼の人生の方向性を決める自由主義の思想に触れることとなった。

勉学を終えてソノラへ戻ると、自由主義軍に入隊し、中央集権制度の実現に向けた戦いに参加した。

しかし、この戦いで挫折を経験し、農業に従事する日々を送ることになる。そんな折、故郷がアメリカから攻撃を受け、再び戦いの舞台に舞い戻った。ここで見事な勝利をあげ、同郷の人々やその土地を守り抜いた。

そうした中、1854年にゲレロ州で「アユトラ革命」が勃発する。これはサンタ・アナの独裁に対する自由主義者たちの戦いであったが、この戦いに彼も自由主義軍の一員として参加した。

彼はソノラ州の議員としてまた地域の長として、その財力をもって地域の人々へ多くの貢献をした。前任の AGULAR 知事が逮捕されてからは、その後任としてソノラ州知事の役職に就いた。その後1857年8月27日の選挙での再選後、20年に渡って州知事の仕事を全うした。さらにはアメリカによるメキシコ北部の侵略や反乱を鎮め、追い返すという国防における重要な功績も挙げた。

その後、BENITO JUAREZ 率いる自由主義派による皇帝 MAXIMILIANO の帝政に対する戦いである「フランス干渉戦争」(1861~1867年)が始まると、彼は自由主義の側につき戦った。

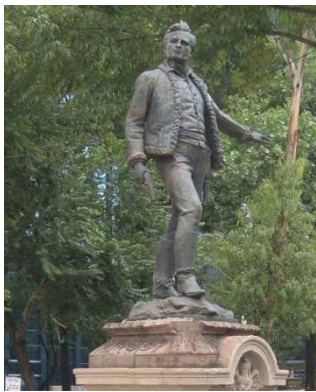
その生涯は1886年1月4日に幕を閉じた。彼の20年という長期にわたる知事在任について専制的であったと批判する意見は確かにあるが、その軍人としての功績により、彼の正当性は歴史上で認められている。

GENERAL DON HERMENEGILDO GALEANA

(地図中 24)

1762年4月13日、ゲレロ州 TECPAN に生まれた独立戦争時代(1810~1821年)の軍人である。クリオージョの裕福な家庭に生まれ、幼いころは家族が経営する荘園 SAN JOSE DEL ZANJON で暮らしていた。

1810年11月7日、後の独立戦争の英雄である MOLEROS が彼の住む町を通りかかった際に、軍への入隊を決意し、800人の武装部隊と「EL NIÑO」と呼



ばれた小さな大砲といっしょに軍に加わった。

その貢献は大きく、**MORELOS** 一行はグレロ州アカプルコまで進軍し、そこを占拠した。その後も彼は **TEPECOACUILCO** や **TAXCO**、**TECUALOYA**、**TENANCINGO** などでの様々な戦いで勝利を挙げ、ハリスコ州 **CUAUTLA** への進軍を開始した。

の進軍を開始した。

1812 年、**MORELOS** の作戦の中でも最も重要な戦いであったといえる「**CUAUTLA** の戦い」に参加した。この 72 日間にも及んだ戦闘において、彼は 2 つの英雄的行為で軍の中心人物となった。そのひとつは **MOLEROS** が政府軍により待ち伏せされ、捕らえられようとしたところを救い出したことである。もうひとつは政府軍の将軍 **SAGARRA** と激しい死闘を繰り広げたことである。両軍の面前で **SAGARRA** 将軍に勝利し、武装を解除させた。こうして 1812 年 5 月 2 日、独立革命軍は政府軍による **CUAUTLA** の包囲を破り、独立の達成により近づいたのである。

その後も **MORELOS** と共に、作戦上重要な契機となった **TEHUACAN**、**ORIZABA**、**OAXACA** など現在のプエブラからオアハカに至る町々での戦いに参加し、数々の功績を打ち立てた。

そして 1814 年 6 月 27 日、彼の最後の戦いが始まった。政府軍により守りが固められた **COYUCA DE BENITEZ** での戦いである。**GALEANA** は大胆な戦法で敵軍に奇襲をかけ、打ち負かした。しかしこの戦いの中、攻撃を仕掛けてくる敵軍に対し剣を振りかざしたところ、1 発の銃弾が彼の心臓を打ち抜いた。治療の甲斐もなく、彼は息を引き取ったのである。

こうして彼の輝かしい人生が幕を閉じた。その死は **MORELOS** に深い悲しみを与えた。その後奮起した **MORELOS** の活躍が、独立達成の大きな役割を担ったのはご周知の通りである。

GENERAL DON MARIANO JIMENEZ

(地図中 31)



1781 年 8 月 18 日、サン・ルイス・ポトシ州に生まれた、独立戦争(1810~1821 年)の英雄である。初等教育は地元で受け、その後メキシコシティへ拠点を移し、鉱山技師になるため専門学校に通い、1804 年に卒業した。その後、婚約のためにグアナファト州へ転居した。

独立戦争の指導者である **MIGUEL HIDALGO** 神父が、独立の叫び「**GRITO**」を挙げたのは 1810 年 9 月 16 日の早朝であり、彼の結婚式から数ヶ月後のことであった。同年 9 月 28 日、彼は解放軍への入隊を希望し、**MIGUEL HIDALGO** のもとを訪れて入隊を果たした。

1810 年、若い技師であった彼が参加した戦闘が **ALHONDIGA DE GRANADITAS** (穀物倉庫) での激戦である。この穀物倉庫に政府軍が立て籠もっていたところに、解放軍が襲撃をかけて独立への動きに拍車をかけた戦いである。

ALHONDIGA DE GRANADITAS(穀物倉庫)



←現在は、グアナファト州立博物館として、独立戦争時の遺物が展示され、一般開放されている。グアナファト旧市街のメインとなる観光名所でもある。

また、**HIDALGO** は彼の技師としての力量を買い、大砲製造の任務を命じた。彼は手際よく、あっという間に大砲を作り上げ、解放軍の大きな力となった。そして大佐に任命され、砲兵隊として前線に赴くこととなった。その後、独立戦争の指導者として有名な **IGNACIO ALLENDE** と共に、メキシコシティを目前にした **MONTE DE LAS CRUCES** の戦いで辛くも勝利を収め、中將に昇格した。

HIDALGO の命によりその後、和平交渉部隊としてメキシコシティへ遠征に出た。副王(宗主国スペイン国王の代理として植民地を統治する職務の称号)に首都メキシコシティの平和的な明け渡しを求めたが、暴力的な脅しとともに追い返される結果に終わった。

その後も数々の戦いに参加し功績を挙げたことで、彼自身も指導者の 1 人として北軍の将軍を任されることになった。そんな折、サルティエジョへ向かう途中の **AGUA NUEVA** という町で政府軍との衝突があった。この戦いは非常に接戦で一時は政府軍に負けそうになるが、解放軍が巻き返し勝利を収めた。この戦いに参加した敵軍の兵士の多くは、彼の恩赦を受け、後に解放軍として戦った。

その後、彼の率いる解放軍は少しずつ兵士を増やしながら、アメリカ国境を超え、テキサスへ向かった。彼らはここで首都攻略のために、再度作戦を建て直した。

しかし、運命は彼に背を向けた。コアウィラ州の **ACATITA DE BAJAN** という村で政府軍の奇襲を受けた彼らは、チワワまで移送される。そこでは裁判が行われ、死刑宣告が発せられた。この結果、彼は同士である **IGNACIO ALLENDE** と共に 1811 年 7 月 26 日、銃殺刑に処されたのであった。銃殺後、その首は切り取られ、グアナファトの政府軍の拠点であった **ALHONDIGA DE GRANADITAS** (穀物倉庫) の建物の 4 角に、独立戦争の指導者である **MIGUEL HIDALGO**、**JUAN ALDAMA**、**IGNACIO ALLENDE** の首級と一緒に、独立達成のその時まで見せしめに吊るされた。

現在、彼の遺体はメキシコシティのレフォルマ通りにある「独立記念塔」の地下霊廟に眠っている。

<次号「第 2 部・④」へ続く>